

1 2

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
安形スズ子	女 性	8 5 歳	1 9 歳	富岡中部

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

嫁ぎ先の富岡の家にいました。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

ラジオで聞きました。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

中宇利の在所の兄が3人出征していましたので、やっと戦争が終わると思ってほっとしました。二番目の兄が戦死したと聞いていましたので、他の二人の兄が無事もどってくれることを祈りました。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「死んだはずの兄が帰ってきた」

私は、男3人、女3人の6人兄弟です。8歳上の二番目の兄の話です。

兄は、昭和16年、長野県松本の東部50部隊に歩兵として入隊しました。その後、満州で関東軍として勤務していましたが、昭和17年頃、南方戦線に参加することになりました。同部隊は、サイパン島の守備隊となりました。兄が所属していた山田小隊（50人）は、サイパン島西方3キロぐらいの所にあるアギガン島という小島の守備隊となりました。

昭和19年6月、本隊のいるサイパン島はアメリカ軍のすさまじい攻撃を受け、幾千人もの日本軍将兵が玉砕*1しました。本隊の将兵全員死亡のため、アギガン島守備隊の50名も全員死亡と認定されたようです。

私が兄の戦死を知ったのは、中宇利の在所で畑仕事をしていたときです。昭和19年の夏の暑い日でした。当時の村長さんで、門沢の渡辺さんがみえて知らせてくれたのです。テニアン島で玉砕したということでした。数日後、村葬が行われ、村長さんが弔辞を読み上げ、墓標も立てていただきました。大ぜいの方が参列され、とてもにぎやかな葬儀でした。

しかし、昭和20年8月15日に終戦となり、その後国際赤十字社を通じて、アギガン島にいた50名は全員生存していることが判明しました。戦友からも兄が生きていることを知らされました。そして、兄は昭和21年9月頃、無事帰国することができたのです。葬式を済ませて2年あまり、死んだはずの兄が生きて

*1 昭和19年6月15日、米軍はサイパンに上陸した。7月7日、サイパン島の陸海軍の守備隊だけでなく、在住していた老人や婦女子などの日本人住民をまきぞえにした、せい惨な玉砕となった。サイパン島を手に入れた米軍は、日本本土を直接空襲できる基地を手に入れたばかりでなく、海上輸送路を確保し、日本の補給路を断つことができ、日本の敗北を決定づけた。しかし、日本はこの玉砕を賞賛し、軍人だけでなく一般の国民にまで、玉砕を強いるようになった。「1億玉砕」の覚悟が宣伝されるようになった。

帰ってきたのですから、それはもう、うれしいやらびっくりするやらで、居ても立ってもいられません。私は、終戦後の21年6月5日に結婚して富岡にいましたので、すぐに中宇利の在所にとんでいきました。兄の無事な顔を見て、本当にうれしかったです。こんなことがあるのか、とそれはもう驚きました。当時の混乱の中では、こういうことも多かったのですね。帰国後に聞いた兄の話です。

サイパン攻撃により孤立したアギガン島の守備隊は、米軍のサイパン攻撃の様子を望遠鏡にて毎日観察していた。米軍は、約1,000隻ぐらいの大小軍艦でサイパン島を取り囲み、全島いたる所に砲弾の落ちない所のないくらいの砲撃を加えた。日本軍を沈黙させた上、多数の戦車を先頭に上陸し、さらに強力な火砲により、日本軍を追いつめていった。

そこで日本軍は、最後の突撃を行い、玉砕したのである。サイパン島には、多数の日本人居留民もいたが、だんだん北方に追いつめられ、海岸の断崖から身を投げ、自ら命を絶った人も数多くいた。(米軍が撮影した記録も残っている)

米軍のサイパン攻撃により、アギガン守備隊には、食糧その他の物資補給は途絶えた。食糧がなくなり、海岸で魚を捕ったり、カタツムリを食べて飢えをしのぐありさまだった。時々、米軍から降伏勧告もあったが、守備隊は応じなかった。

苦闘を続けていたが、終戦となって正式に降伏し、サイパン島に収容された後、昭和21年に無事帰国することができた。

一番上の兄は、満州で終戦を迎え、シベリアに1年ほど抑留されました。右手の指を凍傷で失い、その後、赤痢にかかり北朝鮮のコモンザンという所で病院に入院したと戦友の方から知らされましたが、その後は生死も何も分からないままになりました。家族で相談し、10年後に葬儀をあげました。一番上の兄は、未だにどこでどうなったのか分からないままです。

戦争は悲劇です。人を不幸にするだけです。世界から戦争をなくし、平和を守っていくことが何より大切です。戦争時代を体験してない人に、戦争の悲劇を感じてもらえることを願っています。

○ 兵士の見送り

中宇利では、八幡神社で式を済ませ、必勝祈願をし、村境まで見送りました。今、碑が立てられているあたりです。

出兵される方は、そこであいさつをし、出発されました。宇理小学校の子どもたちも全員参加し、村の人たちも出られる人は総出で見送りました。



▲ 中村との境に建てられた送迎の碑